

SNS 利用に情報リテラシー教育が果たす役割についての研究

Study about the Role Information Literacy Education Achieves in SNS use

池村 努^{*1}

Tsutomu IKEMURA^{*1}

^{*1} 北陸学院大学短期大学部コミュニティ文化学科

^{*1} Community and Culture Department, Hokurikugakuin Junior College

Email: ikemura@hokurikugakuin.ac.jp

あらし：SNS を利用したトラブルは、一時期に比べれば話題になる回数が減りつつあるが、無くなってはいない。また Fake News に代表されるように「ウケるが勝ち」という問題も生じてきている。情報リテラシー教育が SNS 利用にどのような貢献をできるのか考察する。

キーワード：情報リテラシー教育、SNS、情報モラル

1. はじめに

スマートフォンの普及に伴い、常時インターネットに接続できる環境整備が進んできている。また契約回線における LTE など高速回線の割合も高まり、本格的なユビキタス社会が実現しつつある。総務省の調べによるとインターネットの利用率は 83% であり、そのおよそ半数をパソコンとスマートフォンの利用が占めている (H28 情報通信白書)。同時に、SNS を利用する割合も増加してきている。ICT 総研の発表によると、2015 年末の日本における SNS 利用者数は 6,500 万人に達し、2018 年には 7,500 万人に達する見込みであると報告されている (2016 年度 SNS 利用動向に関する調査)。世代ごとにみると 20 代では 70% 以上が SNS を利用している。30 代になると 65%、40 代では 55%、50 代では 40% となる (H28 情報通信白書)。このように、SNS の利用は若者が主流となっている。

SNS の利用において、若者特有の「ウケたい」という気持ちが、一般社会において「問題あり」捉えられる投稿に繋がることがある。アルバイト先で軽い気持ちから撮影した反社会的ともいえるイタズラ写真を自ら SNS に投稿し、ネット上で拡散したあげく炎上して社会的制裁を受けた例は枚挙にいとまが無い。若者達は仲間内でのみ写真を共有しているつもりであろうが、すぐに拡散、複製され、追跡が行なわれたのち個人情報特定され、非難を受け炎上するような流れができあがっている。総務省のデータによると SNS の炎上は 2000 年代前半から少なからずあったものの、Twitter や Facebook など普及し始めた 2010 年頃から一気に増加し、その後 2013 年度をピークに、減少傾向にあることが読み取れる。減少した理由として Twitter や Facebook など SNS の利用方法についての注意喚起が為されたこととの関連が考えられる。しかし減少したとは言えるものの、一定数の炎上は毎年発生している。SNS 利用が一般化した現代に併せて、対策が求められている。

そこで本研究では SNS 利用の現状について確認し、情報リテラシー教育の中で情報マナーや情報モ

ラル教育がどのような役割を果たすことができるかについての確認を行なう。その後本学で必修科目として設定されている「情報機器演習 A」において情報モラル・情報マナーの内容に反映し、学生にフィードバックを行なう。

2. 研究概要

本学の短期大学部学生を対象に SNS 利用状況に関するアンケートを実施する。同時に SNS を利用する上で、知っておくべき特性についての確認を行ない、現状の確認を行なう。

SNS を使用する上で必要となる SNS の特性についての基本的な知識については、総務省「社会課題解決のための新たな ICT サービス・技術への人々の意識に関する調査研究」(平成 27 年)での調査項目を参考に質問項目を設定する。同調査結果を参考にすることで、一般と本学学生との傾向について比較できることを期待している。

表 認知度に関する質問項目

(1)	SNS によっては投稿に位置情報が付くことがある
(2)	SNS によっては、他人がメールアドレスで自分のアカウントを検索できる
(3)	SNS によっては、投稿の公開範囲を設定できる機能がある
(4)	SNS での発言は、匿名で行っていても本人が特定されることがある
(5)	SNS では他人の投稿に自分の名前がタグ付けされると、そこから自分のプロフィール情報等を確認される場合がある
(6)	SNS によっては設定変更しないと、プロフィールに登録した情報等が全てのユーザーに公開される場合がある
(7)	SNS では、過去の発言を遡ることで趣味や嗜好などが知られてしまうことがある
(8)	SNS では、自分の発言を限定公開していても他人に共有(リツイート等)されると公開される場合がある
(9)	SNS で一度発言した内容は、インターネット上から削除されないことがある

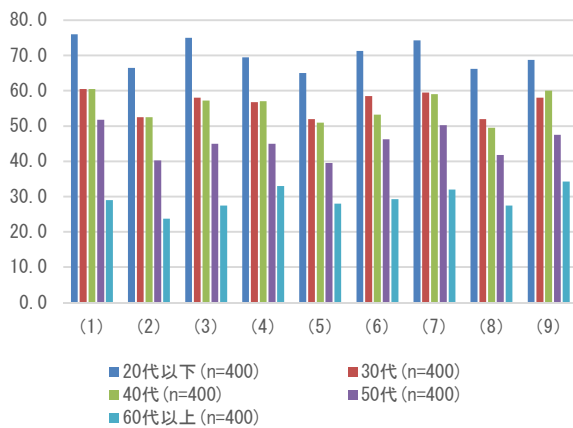
アンケート結果を元に傾向を分析し、情報モラル・マナー教育に反映する。モラル・マナー教育の中に情報処理推進機構が提供している WEB 教材を組み合わせることで、より効果的なモラル・マナー教育

実現を模索する。

参考とした「社会課題解決のための新たな ICT サービス・技術への人々の意識に関する調査研究」の 20 代以下についての結果では、(2)「SNS によっては、他人がメールアドレスで自分のアカウントを検索できる」、(5)「SNS では他人の投稿に自分の名前がタグ付けされると、そこから自分のプロフィール情報等を確認される場合がある」、(8)「SNS では、自分の発言を限定公開していても他人に共有（リツイート等）されると公開される場合がある」、(9)「SNS で一度発言した内容は、インターネット上から削除されないことがある」に対する認知度が低い傾向が見られた。本学で実施したアンケート結果でもほぼ同様の傾向が見られ、SNS の特性に対する認知度が足りないことが確認できた。一方、親の年代とも言える 40 代～50 代では 20 代以下以上に認知度が足りないことが確認できた。さらに 60 代以上では 20 代以下に比べて半分程度の認知度しかないケースもみられた。このことから学生に対する情報モラル・マナー教育に加えて、保護者向けに認知度向上を図る取り組みが必要であることが読み取れてきた。

本研究では保護者対象の取り組みは予定していないため除外するが、保護者に対しても何らかの形で SNS 利用の注意点について説明を行っていく必要がある。

留意すべきSNSの特性への認知度（年代別）



(平成27年版情報通信白書より)

3. 授業概要

本学学生に対する情報モラル・マナー教育は入学時のオリエンテーション期間に実施されるコンピューター利用オリエンテーションで概略を説明している。しかし極めて短時間でこなわれていることと、情報量が多くなっているため、別途「情報機器演習 A」にてモラル・マナー教育の時間を取っている。

「情報機器演習 A」では情報モラル・マナー教育と、情報リテラシー教育として Microsoft Office の学習を行なっている。15 回授業の内、学内環境についての説明と学習、ウィンドウズの操作および情報モ

ラル・マナー教育は最初の 2 回に分けて行ない、残りの 13 回分は Excel と Word について行なっている。テキストは「情報倫理ハンドブック (noa 出版)」と「実践ドリルで学ぶ Office 活用術 (noa 出版)」を用いている。「情報倫理ハンドブック」では現代社会で必要となる知識が記載されているために、系統立てて学ぶことができるようになっている。特にネットコミュニケーションについて、メールや SNS の使い方などを含めて重点的に取り上げられている。授業進行として、はじめの 2 回が終了した段階で、学習内容を確認するための小テストを実施している。この結果も参考にしながら、必要に応じて情報モラル・マナー教育をくり返し行なっている。

Excel と Word については、作表・関数利用・グラフを用いた分析と、Word 文書に Excel で作成したグラフを挿入する練習を行なっている。情報マナーの復習として、メール添付による課題提出などを加えることにより、情報モラル・マナー教育の振り返りについても行なっている。

4. 現状の課題と考察

現在大学に在籍している学生は、インターネットを使用し、スマートフォンが身近に存在するのが当たり前前の世代、所謂「デジタルネイティブ」である。何か分からないことがあっても、インターネット上の検索窓にキーワードを打ち込めば、即座に何らかの回答が得られるようになっている。携帯電話やスマートフォンも高等学校在学中にはすでに手にして、仲間内で連絡を取り合うときには LINE などの SNS を用いることが自然になってきている。一方で親や教師側は、情報モラル教育が後手に回っているとも言える。学生達が SNS の特性を理解し、安全に活用するには、保護者や教員側の理解が重要であると考えられる。

今回の研究では、学生達は SNS に対して一定の知識を持っていることが確認できた。授業内での振り返りについても、情報通信白書の調査結果を裏付けるものが得られた。しかし一時的な感情の昂ぶりから、感情的な投稿をしてしまうということも散見される。感情的になってしまいそうなどきにも適切な使用を心がけられるような使用上のアドバイスをしていくことが望ましい。今後の課題として取り組んでいきたい。

SNS 利用が一般化している現代だからこそ、情報リテラシー教育を通じて情報モラル・マナー教育に取り組む必要性が感じられた。